

支部だより

～中部支部からのたより～

神取秀樹

名古屋工業大学

はじめに

日本における生物物理学発祥の地とも言えるこの地域は支部活動も活発であり、平成 15 年に垣谷俊昭支部長のもと支部が設立されました (279 号参照)。その後、本間道夫氏、伊藤 繁氏、桑島邦博氏、神山 勉氏、秋山修志氏が 2 年の任期で支部長を務められ、法人化された学会年度に合わせる形で平成 27 年 5 月より私が支部長となりました。本稿ではまず前任の秋山支部長のごあいさつを掲載します。

秋山支部長のごあいさつ

任期を終えるにあたりご挨拶をさせていただきます。学会本体の法人化に伴い、支部でも規約改正や会計・活動報告など新しい動きがございましたが、支部会員皆様のご理解やご協力のもと滞りなく進めることができました。また、毎年催される支部講演会は重要な支部会活動の一つですが、こちらも執行部(幹事:古谷祐詞氏,奥村久士氏,会計:向山厚氏)を中心とする関係者にご協力頂き、盛況のうちに終了することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。私の任期中、中部支部会の輪を少しは強めることができたのではと考えますが、その輪を広げるまでは力が及びませんでした。中部支部会の益々の発展を願いつつ、次期支部長(7代目)である神取秀樹先生(名古屋工業大学)にバトンをお渡しします。

平成 26 年度中部支部講演会

アクティブなグループの揃う中部支部にとって、支部講演会は最も重要な活動の場であり、この日に総会も開かれます。平成 26 年度の支部講演会は平成 27 年

3 月 10 日に岡崎コンファレンスセンターで開催されました。参加者は 41 名、研究発表は 33 件(口頭発表 17 件、ポスター発表 16 件)であり、例年通り、活発な議論が展開されました(プログラムなどは支部 HP をご覧ください)。

支部講演会では毎回、口頭発表者の中から優秀発表賞を選んで表彰していますが、今回は以下の 4 名が受賞されました(五十音順)。おめでとうございます。

石井健太郎(岡崎統合バイオ)「プロテアソーム $\alpha 7$ サブユニットの多量体ダイナミクスの超分子質量解析」

佐藤竜馬(名大)「光回復酵素における電子トンネル移動経路の研究」

中村 伸(名大)「光合成水分解反応におけるチロシン Yz を経由するプロトン移動機構:FTIR 法及び量子化学計算による解析」

吉田一帆(名工大)「新規光受容性 Gs 活性型キメラ分子の機能創成」

講演会はレベルも高く充実していた一方、33 件の発表内訳は名大が 20 件、分子研・統合バイオが 9 件、名工大が 4 件であり、愛知県外からの発表はありませんでした。これが秋山支部長の書かれた「輪を広げるまでは力が及びませんでした」という部分かもしれない。中部支部は三重・岐阜・静岡・長野・福井・石川・富山・新潟(規約の記載順)を含みますので、ぜひ輪が広がってほしいものです。

新しい役員として 2 名の幹事、1 名の会計を選任する必要がありましたが、中部は広いという意識もありましたので、名大の廣明秀一先生に加えて金沢大の内橋貴之先生に幹事を引き受けていただきました。会計は名工大の岩城雅代先生にお願いしました。中部は広いので講演会への旅費の問題などありますが、中部支部は九県より構成されることをここで改めて確認しておきたいと思います。



懇親会後の集合写真

岡崎 3 研究所の研究会を活用しよう

日本生物物理学会年会においてシンポジウムは年会の華です。今年の金沢年会では 40 件近いシンポジウムが予定されており、活発な当学会のアクティビティを証明しているように思います。シンポジウムが成功すると、次はもう少し長い時間、議論したいと思われるかもしれません。そんなときに「使える」のが岡崎 3 研究所の研究会です。

岡崎市には分子科学研究所、生理学研究所、基礎生物物理学研究所という 3 つの研究所があり、これをつなぐように岡崎統合バイオサイエンスセンターがあります。3 つの研究所はいずれも大学共同利用のための研究機関であり、研究会の開催を支援してくれます。生物物理学という学問は 3 つの研究所すべてに関わりますが、例えば分子研研究会の web site には「特定のテーマについて 2 日間ほどで 20 人～40 人程度で集中的に議論する」研究会であって、同じテーマについて定期的に開催している研究会や大きな会議の部会等は対象としない旨が書かれています。ここでは私が世話人の 1 人として 4 月に開催したばかりの分子研研究会を例にとりご紹介したいと思います。

生物系の科研費・新学術領域「運動マシナリー」には『代表から質問』シリーズという名物企画があります。これは、宮田真人代表からメーリングリストを通していろんな問いが寄せられ、班員で討議するというものです。昨年 10 月に、「プロトン駆動のバクテリアべん毛モーターでは H_3O^+ でも e^- でもなく、 H^+ が実際に流れていると考えられていますか？もしそうだとすると、直接の証拠は何でしょう？『 Na^+ 駆動のものがあるから』は‘直接’の証拠ではありません。」という質問がありました。それに対して私の「 H^+ か H_3O^+ か (OH^- か) e^- か」と問われると、コメントしないわけにはいきません。いちばんよくわかっているバクテリオロドプシンの研究者として BR についてコメントしますが、……」からスタートして、べん毛モーターのプロトン透過について難波啓一先生（阪大）と私が中心になって意見交換を行いました。そんな中、できれば一度、集まってべん毛モーターを含む膜タンパク質の内部を流れるイオンについて徹底的に議論したい、という機運が盛り上がり、理工系の科研費・新学術領域「柔らかな分子系」の仲間である北尾彰朗先生（東大）、飯野亮太先生（岡崎統合バイオ）に世話人として加わっていただき、分子研研究会として申請することになりました。

世話人代表として私が最初から決めていたことは、あまり研究会のない 4 月に岡崎コンファレンスセン

ターの大会議室に 100 人集めて 2 日間フルに行うことでした。あの会場は椅子の座り心地もいいし、講演していてもあんな気持ちのいい場所はありません。3 研究所の研究会であればこの会場が無料で使えますし、分子研研究会の場合、80 万円までの旅費と 15 万円までの印刷費が支援されます（尤も我々の構想した研究会規模が標準より大きすぎたため、採択して旅費を満額いただいたものの不足分が発生、2 つの新学術領域から協賛という形で支援をいただくことになりました）。

こうして開催した分子研研究会『膜タンパク質内部のプロトン透過を考える』（4 月 20～21 日）には 114 名の参加者があり、29 件のポスター発表と 24 件の口頭発表がありました。世話人の狙い通り、実に面白い研究会だったと思います。本稿は研究会の内容をお伝えすることが目的ではありませんのでその部分は省略しますが、討論参加者として呼び出した吉田賢右先生の「最近の研究絡みの研究会ばかりの中、お金のことを全く感じないこんな気持ちのいい研究会は珍しい」という感想を最大の賛辞として受け取りました。

分子研研究会には大学院生が主体的に企画する分子科学の「若手研究会」もあります。若手研究者にとってはアイデアの見せ所です。研究会の申請に当たっては所内対応者の先生に引き受けていただく必要がありますので、岡崎の 3 研究所に生物物理学のどんな先生がおられるか、確かめられたらいいでしょう。私は現在、分子研の運営会議委員を務めていますが、共同研究の委員会はよい研究会提案を待ち望んでいます。

今回の中部支部だより後半では、中部支部の重要な構成員である岡崎の研究所が関わる研究会を紹介しました。シンポジストの皆さん、金沢のシンポジウムを成功させて、次はぜひ岡崎で研究会を。



分子研研究会の集合写真（平成 27 年 4 月）